1000号記念

おおさかウォッチング

～思い出の地を訪ねて～

大阪歯科保険医新聞の名物企画となった「おおさかウォッチング」。1989年の新春特別号からスタートして苦節20年。昨年11月には200回を迎えた。機関紙1000号記念では、過去に「おおさかウォッチング」で登場した思い出に残る場所を訪ねる。

中之島

新旧調和した町並み

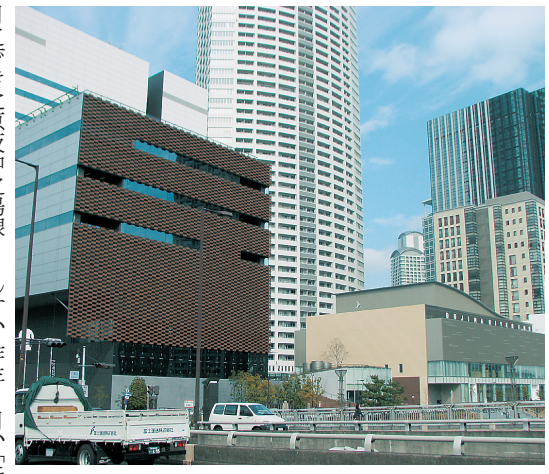
昔の輝きがよみがえる

1989年7月25日付の「おおさかウォッチング」第6回で登場した中之島は、当時、「パリに似た大阪の出発点」として紹介されていた。中之島の細長い形がパリ発祥の地であるシテ島と共通するという。

昔をさかのぼれば、江戸八百や町、なにわ八百や橋と言われ、橋の多い中之島周辺は交通手段として船の流通が発達し、そして船場が商人の町として、道修町が薬問屋の町として、成長。近代に入ると、政治とビジネスの街として定着した。

最近の目立った変化は、何と言っても昨年10月にできた京阪中之島線だ。世間からの熱い視線が今、この地に注がれている。

「水の都復活につながる魅力的な水辺のまちを創造する」ことを目的として、昨年5月、「ほたるまち」が誕生。朝日放送局やホール、飲食店や診療所を有する商業施設「堂島クロスウォーク」など次々と建設。人の流れを呼び込んでいる。



中之島の新名所「ほたるまち」

中之島は昔の輝きを取り戻しつつある。

公会堂、図書館、造幣局は昔のままの姿を残しており、新しい物と古いものが共存していることがこの町の新たな調和を作っている。夜になると周辺のビルの明かりや歴史的建造物のライトアップが水面に映り、幻想的な雰囲気を演出する。

私が初めて大阪に来たとき働いていたのは淀屋橋だった。悩んだり、行き詰ったりしたとき、夜の土佐堀川をみていると落ち着いた。だから中之島の風景は懐かしい気恥ずかしい気持ちがよみがえる。

（新聞部・矢部あづさ）

あの場所はいま

箕面公園

精悍な野口英世像

海外のものとは似つかぬ顔

元新聞部長大西和典氏が「おおさかウォッチング」で箕面を訪れ、野口英世の銅像の写真を紹介したのは1995年の秋である。その40年前に建てたものらしい。

この銅像がペンシルベニア大学構内の野口の胸像とどの程度似た顔かを確かめるために、私はカメラを携えて箕面公園を訪れた。この動機の阿呆らしさのため、妻は同行を拒否した。

書物などに載っている野口の顔貌は時代のせいかチャップリンに似てるし、年をとるとアインシュタインにも似ただろう。私がペンシルベニア大学の野口像をカメラに納めたのは1988年、大西氏の17年前である。

当時フィラデルフィアで催された国際学会での私の一般講演を聴いてくれた現地の学者がオンボロ車で私と妻を大学へ案内してくれた。大病する前だった妻が野口の胸像と並ぶと目付きがよく似ており一般的日本人顔というか、どちらかと言えば朝鮮やモンゴル系の上方風の坊ちゃん顔であった。野口の胸像は各地に多数あり、メキシコのユカタン州都メリダにもあるが、そこまで確かめにいく程酔狂でも金持ちでもない。

精悍な顔つきの野口英世像

箕面の滝道から、つづら折り5段の急な坂をポケットのニトロ舌下錠を握りしめて何とか登ると野口の像が人気もなく孤立している。

大西氏の写真から想像していたとおり野口の顔貌はペンシルベニア大構内の像とは似てなかった。真摯な目付きで試験管を掲げている顔は男前で東北人特有の精悍さに溢れていた。野口英世は子ども向き「読書感想文宿題用全集」の常連で、日本では肩書き無しで通用する有名人だが、外国では子どもも医学生も知る人はほとんど居ない。その活躍時期は司馬遼太郎の『坂の上の雲』と一致するが、この大河小説にも登場しない。

野口についての比較的新しい部類の資料として、彼の研究の科学的功罪はプリコット女史が、それと供に人間的な側面は渡辺淳一の著作がある。

私の野口に対する最大の関心は発展途上だった当時の「日本の国策」と野口をヒーローに仕立てたかった「メディア」との関わりであり、誰かの論述を待ちたいところである。

若い頃の私はプリコット女史の大著を数日で読破する馬力があったが、今は6分現役3分寝たきりの無気力老人である。

（新聞部・篠部正夫）

大阪城梅林

大阪の早春彩る風物詩

35年にわたって人々を魅了

天気予報の「明日は3月中旬の陽気となるでしょう」の予報を聞いて、春のつもりで朝出ると、まだまだ寒いこの季節。さざんかの鮮やかな紅白の花が満開な姿を見るとこの時期がまだまだ冬真っただ中であることを実感させられる。寒風の中で開いた梅の花は、地球温暖化の異常気象が言われる中でも、着実な春の到来を知らせてくれる。

「難波津に咲くやこの花冬ごもり今を春べと咲くやこの花」という古歌や天神さんの梅鉢の紋などにゆかりも深く、梅は昔から大阪の代表的な花として親しまれてきた。今では大阪を代表する梅の名所となった大阪城梅林。「ウォッチング」では1994年3月25日付で紹介している。

梅林から望む大阪城

大阪城梅林の歴史は意外と新しい。かつての大阪の花の名所をとり戻し身近でお花見が楽しめるように、大阪市がすすめた「花の公園」づくりの第1号として大阪城梅林計画が決定。とくに大阪を代表するこの地を選び、創立100周年を迎えた府立北野高校の六稜同窓会の協力を得て、約20種、計880本が植えられ、1974年3月に開園した。その後、補植等の整備を行いながら、今年35周年を迎える。

面積1・7㌶、種類約93品種、本数約1250本で、1月から3月の間、早春を楽しませてくれる場所となっている。

大阪城梅林は大阪の早春の風物詩として1月末から3月中旬にかけての梅のシーズンには毎年多くの人が訪れる。

都心部にこれだけの規模の梅林があること自体珍しいが、ここの特徴は花のバランスを考えて絶妙な配置がなされている事と、珍種を含む数多くの花を楽しむ事が出来る事。一番の見ごろは2月末から3月初旬にかけて、陽射しに春の気配が感じられても、寒風吹きすさぶ季節だが、3月に入るとメジロも見られ春を楽しませてくれる。

今では、多くの老人カメラマンが、一眼レフのカメラを構えて写真撮影をしたり、スケッチブックに筆を走らせたりしている姿は、高齢化社会を反映している。

（新聞部・近藤正）